

第1回教育哲学会奨励賞 選考結果および選考理由

選考結果

第1回の教育哲学会奨励賞は、『教育哲学研究』第108号、109号に掲載された論文を対象として理事会において選考を行い、奨励賞にふさわしい論文として、井谷信彦会員の「問いの螺旋へ—教育哲学者の語りの作法」（『教育哲学研究』第108号所収）を受賞作として選定した。

授賞理由

井谷論文は特集「教育と将来世代への責任—いま教育哲学者はいかに未来を語るができるか」に収められた一篇である。論文は、3.11以後の危機的状況を深刻に受け止めつつ、にもかかわらず「未来を語る」可能性を、ボルノウとハイデッガーという、まさにそうした危機—故郷喪失、そして近代技術による人間の道具化—について語った哲学者の思索に求めようとする。ただし、井谷会員がボルノウとハイデッガーに求めるのは、危機克服のための答えではなく、危機について「いかに」語るかという「語りの作法」である。井谷会員は、この2人の哲学者の語り、ともに、危機と希望、危険と救済といった、常識的に見れば矛盾すると思える対立物を重ね合わせる「ねじれ」の構造を持っていることに注目する。そして、この「ねじれ」に、今ある現実を超えて思索を続けることを促す哲学的な「語りの作法」の要諦を見出している。今教育哲学者に求められているのは、使い勝手の良い理念や概念を提供して答えを出すことではなく、「ねじれ」や矛盾を孕んだ「語りの作法」によって、世界と人間の本質へと向かう思索を開き続けることなのである。

このように、井谷論文は、哲学的テキストの単なる解説・注釈に終わることなく、現実の出来事に対峙するわれわれ自身の足元を揺さぶり、かつわれわれに求められる思索のあり方を示唆する優れた論考となっている。自家薬籠中のものとしたボルノウ、ハイデッガーの思想の読解に基づいて、彼らの思想と今日的状況とをつなげて考察する論述はきわめて手堅く説得力があり、今日的状況との対峙によって哲学的テキストの新たな含意を取り出す可能性をも示している。

3.11以後の状況の描写がいくぶんステレオタイプ的であること、議論がもっぱらメタレベルに定位されていて「教育」という営みそのものへの言及が少ないこと、など、物足りない点も残るが、教育哲学の専門知識に基づいて時代のリアリティに接近しようとした果敢な試みは、教育哲学の可能性を広げるものとして高く評価できる。

以上から、理事会では井谷信彦会員の論文「問いの螺旋へ—教育哲学者の語りの作法」を第1回教育哲学会奨励賞にふさわしい論文として選定した。